

原 著

ダウン症児の自己制御機能の発達に関する研究

小 島 道 生*・池田由紀江**・菅野 敦***
橋 本 創 一***・細 川 かおり****

ダウン症児の自己制御機能の発達について調査した。小学校の担任の教師に、自己制御機能を測定するよう作成された「行動調査」への記入を依頼した。結果は、自己制御機能の二領域は、7、8歳代においては自己抑制面が高得点であるが、11、12歳代には自己主張・実現面が自己抑制面より高得点になることが明らかとなった。ダウン症児の自己主張・実現面では、より主体性が求められる他児へのかかわりに関しては劣っていること、自己抑制面では他者とのかかわりの中で相手の意見を踏まえた柔軟な対応に関しては劣っていることが示唆された。また、ダウン症児の自己制御機能の発達には、自己制御の得点と生活年齢が中程度の相関があり、自己制御の得点と精神年齢及び社会生活年齢は相関がなかった。さらに、所属学校・学級別に自己制御の得点について検討したが、有意差は認められなかった。

キー・ワード：ダウン症 自己制御

I. 問題と目的

ダウン症児・者に対しては、これまでさまざまな領域から研究が行われ、徐々にその発達の様相が明らかにされてきた。その中でもダウン症児・者の社会性は、発達良好な領域という印象をもたれやすく、彼らのパーソナリティ特性は「人なつこい」「陽気で朗らかな」「社交的な」といった記述がなされることが多い(建川, 1968¹⁷⁾)。しかし、菅野・池田・上林・大城・橋本・岡崎(1987⁶⁾)は津守式乳幼児精神発達質問紙を用いた研究において、領域による発達差が3歳から明らかとなり、友人関係や遊びの項目を中心とする社会の領域が遅滞する傾向がみられたと報告している。また、細川・池田・橋本・

菅野(1992⁴⁾)は学校への適応に関する調査において、意思交換、自己志向性、友達との関係、集団参加などの領域で問題がみられたと報告している。従って、これらの研究からダウン症児・者は対人関係に関する領域では遅滞することが示唆される。このような実態を踏まえ、岡崎(1991¹²⁾)は、これまでの社会性の発達の捉え方に加え、新たに人とかかわりながら自己と他者を分化し、他ならぬ自己を確立する過程を検討する必要性を述べている。さらに岡崎(1994¹³⁾)は、これまでダウン症児に対して取り組まれてきた早期教育においても、言語、認知、運動と各領域に分けて発達援助の在り方が検討されてきた点を踏まえ、このようにダウン症児の発達をいくつかの領域で捉える視点に加えて、それら各能力を統合する働きである自己の形成について検討する必要性を述べている。

また、近年ノーマライゼーションの影響から知的障害者のQOLの向上が叫ばれているが、

*筑波大学心身障害学研究所

**筑波大学心身障害学系

***東京学芸大学特殊教育研究施設

****鶴見女子短期大学保育科

それを実現するには環境面だけの整備でなく、知的障害者自身の心理的前提条件が必要とされている(林・河東田, 1996²⁾)。つまり、知的障害を有する者も自己決定を備えた主体的で能動的なパーソナリティが求められている。従って、彼らのQOLの向上を目指した発達援助という観点からも、パーソナリティの中核をなす自己へのアプローチは不可欠なものであると考えられる。

これまでのダウン症児・者の自己に関する研究は、その萌芽期ともいえる乳幼児期においていくつかの研究がみられる(Mans, Cicchetti, and Sroufe, 1978¹⁰⁾; Hill and Tomlin, 1981³⁾; Loveland, 1987⁹⁾) が、学齢期以降のダウン症児・者の自己に関する研究は、一事例の会話分析を通して自己意識を縦断的に検討したもの(今野, 1997⁸⁾)のみである。また、これらの研究は自己に対するアプローチとして、いずれも認識の対象としての自己を扱っている。

しかし、Bandura (1978¹⁾) が環境と行動と個人の三者間の相互決定性を提唱して以来、それらの関わり合いを規定する条件の解明の一つとして、新たに自己の機能的側面への関心が高まってきている。この背景には、行動の主体として、あるいはさまざまな状況や環境の中で相互作用する内的過程としてのコントロールシステムである self が重視されるとともに、環境や外的状況を中心としたこれらに従属的な Self-Control 観からより主体的に積極的にかかわるものとしての Self-Control 観への変化がある(庄司, 1996¹⁵⁾)。ダウン症児・者が主体的で能動的なパーソナリティを望まれていることを踏まえると、主体的側面を含む自己の機能的側面に関する研究は、自己の認知的側面と同様に重要であると思われる。従って、本研究ではダウン症児・者の自己の機能的側面に注目し、彼らの自己制御機能の発達に関する研究を行うことにする。

自己制御機能に関する概念は複雑かつ多様であるが、本研究においては行動における自己制御機能を中心に据えることとし、自己制御機能

を自分の意志・意図にもとづいて目標指向的に自分の行動を統制する働きと定義する。従って、自己制御機能は柏木(1988⁷⁾) が指摘しているように、自己の欲求や意志を他者に対して主張し、それを行動として自己実現する自己主張的側面と、逆に自己の欲求や意志を他者の調和のために抑制したり制止する自己抑制的側面の両面から構成されるものとする。

本研究では、学齢期のダウン症児に対して学校での自己制御機能を測定する「行動調査」を用いて、自己制御機能の発達の様相を明らかにすることを第一の目的とする。また、学齢期ダウン症児の自己制御機能の発達を規定する個人内要因について検討することを第二の目的とする。さらに、所属学校・学級別に自己制御機能の発達について検討することを第三の目的とする。

II. 方法

1. 対象者

過去に早期教育プログラム(筑波大学池田研究室)に参加し、小学校に通っているダウン症児74名を対象にした。有効回答率は、62.2%(46名、男子29名女子17名)であった。対象児は、養護学校小学部、小学校特殊学級、小学校通常学級にそれぞれ在籍していた。対象児の所属学年をTable 1に示した。主な居住地は茨城、東京などの関東地区であった。

2. 質問紙の作成と内容的妥当性の検討

「行動調査」に関する調査項目は、柏木によって自己制御機能を測定するよう作成された「幼児の行動評定尺度」(1988⁷⁾)をもとに決定した。現職の養護学校小学部教員、小学校特殊学級の

Table 1 学年(人)

1年生	10
2年生	6
3年生	9
4年生	14
5年生	4
6年生	3

教員、小学校通常学級の教員それぞれ2名、合計6名に「幼児の行動評定尺度」について、学齢期ダウン症児に対する質問項目としての内容的妥当性について検討を依頼した。それぞれの質問項目に対して適切か否かの2件法による評定を行い、全員が適切と判断した項目のみ採用することとした。その結果、全71項目のうち21項目が不適切と判断され、50項目を質問項目として採用することにした。

なお、質問紙は「自己主張・実現」20項目と「自己抑制」30項目の二領域に分かれている。「自己主張・実現」の下位次元として、「遊びへの参加」8項目、「独自性・能動性」6項目、「拒否・強い自己主張」5項目の三つがあり、「自己抑制」の下位次元として、「遅延可能」11項目、「制止・ルールへの従順」6項目、「フラストレーション耐性」7項目、「持続的対処・根気」5項目の四つがある。削除した21項目は、各領域の下位次元よりほぼ均等に抽出されていたことより、そのままこれら領域と下位次元を用いることにした (Table 2)。なお、「自己主張・実現」に属する1項目と「自己抑制」に属する1項目は、柏木 (1988) の因子分析の結果においてどの下位次元にも属さなかったため下位次元の分析では削除した。評定は「ほとんどない」から「きわめて多い」の5段階で求めた。

3. 調査の手続き

ダウン症児が現在通っている養護学校小学部、小学校特殊学級、小学校通常学級の担任の教師に保護者を通して調査用紙を配布し回答を求めた。回答は保護者の手を経ず、直接郵送を依頼した。

4. 分析

「ほとんどない」から「きわめて多い」の5段階に1点から5点を与えた。そして、「自己主張・実現」と「自己抑制」の二領域と男女差についてそれぞれt検定を行った。また、自己制御の得点と生活年齢、精神年齢、社会生活年齢との相関を求めた。さらに、自己制御の得点について所属学校・学級を要因とする一元配置の分散分析を行った。

III. 結果と考察

1. 自己制御機能の発達の様相

「行動調査」の全体の平均点は、3.1点 (SD=0.38) であった。二領域における平均得点は、「自己主張・実現」が2.9点 (SD=0.52)、「自己抑制」が3.2点 (SD=0.39) であった。これら二領域の発達の様相は Fig.1 の通りである。7、8歳代においては、自己抑制面が自己主張・実現面より高得点であるが、11、12歳代になると逆に自己主張・実現面が自己抑制面より高得点になっている。これは、まず言語発達の影響を受け年齢が高くなるにつれて自己主張・実現面が伸びた可能性が考えられる。また、自己抑制的側面を重視する日本 (柏木, 1988⁷⁾) においては、7、8歳代のダウン症児も健常児同様しつけの影響を受けて自己抑制面が自己主張・実現面より早期より発達していたとも推測できる。さらに、11、12歳代にかけて自己主張・実現面が自己抑制面以上に伸びた要因としては、青年期に近づくにつれ親や社会的規範を受け入れるだけでなく、むしろそれに抗するようになる (柏木, 1988⁷⁾) という健常児と同様の心理的発達の影響を受けた可能性もあげられる。今後は、ダウン症児の自己主張・実現面の発達と言語発達や心理的発達との関連性について検討していく必要があると考えられる。

また男女差については、自己制御の得点、「自己主張・実現」、「自己抑制」の平均得点についてそれぞれt検定を行ったが、いずれも有意差はなかった。健常幼児を対象とした柏木 (1988⁷⁾) の研究においては、自己抑制面において男女に有意差が認められていた。これは、特に女兒に従順さや自己抑制を求める日本の親のしつけが反映した結果であるとされていた (柏木, 1988⁷⁾)。しかし、ダウン症児においてはこのような有意差は認められなかった。この要因としては、まず本研究におけるダウン症児の対象年齢が学齢期であったため、親のしつけの影響を健常幼児のように受けていなかったことがあげられる。また、ダウン症児に対する親のしつけが健常児とは異なっていた可能性や、逆

Table 2 下位次元ごとの質問項目

自己主張・実現	
〈拒否・強い自己主張〉	
8	友達に意地悪されたりいやなことをされると止めてくれと言える。
9	自分の順番に他の子が割り込んできた時、“いけない、私の番だ”と言える。
12	いやなことは、はっきりいやと言える。
13	友達に惑わされずに自分のやりたいことを言える。
14	他の子供と自分の意見が違っていると臆せずに主張する。
〈遊びへの参加〉	
1	好きな玩具、選びたい玩具を選んでとれる。
5	入りたい遊びに自分から“入れて”と言える。
9	自分のやりたい遊びを友達を誘って始められる。
18	遊びたい玩具を友達が使っている時、“貸して”と言える。
20	遊びたい友達を自分から誘って遊べる。
21	してほしいこと、ほしいものをはっきり大人に頼める。
40	他の子と自分の意見が合わないとき折衷案を見つけられる。
41	状況に応じて行動を変えられる。
〈独自性・能動性〉	
2	意見をきいたり、感想を求めると、自分なりの考えや感想を出す。
4	遊び方や制作などにアイデアをもっている。
10	新しい遊びや難しそうな課題に興味をもつ。
15	他の子に自分の考えやアイデアを話す。
16	自分の考えや意見を自分から述べる。
19	人から促されないと行動が起こせない。
自己抑制	
〈遅延可能〉	
26	“ちょっと待っていなさい”で待てる。
27	教えられたことを理解し、教示どおりに実行できる。
30	遊びの中で自分の順番を待てる。
37	集団の中で我慢できる。
39	課題に沿った絵や制作を描いたり作れる。
42	教師に話かけた時、他の子が話している間待ってられる。
43	遊びのルールが守れる。
44	相談や大勢で話している時、自分の順番を待てる。
45	相手の話を終わりまで聞ける。
47	前にした同じ失敗を繰り返さない。
49	“後であげます”と言えば待てる。
〈制止・ルールへの従順〉	
11	人の目を引こうと目立ったことやかわったことをしてみる。
23	したいことをとめられるとやめる。
28	“してはいけない”と言われたことはしない。
31	してはいけない時があることがわかり、やめる。
38	叩かれても、すぐ叩き返さない。
46	他の子の始めた遊びやいたずら、ふざけにすぐつられて、一緒になってする。
〈フラストレーション耐性〉	
24	悲しいこと、くやしいこと、つらいことなどの感情をすぐ爆発させずに抑えられる。
29	他児のものが欲しくても我慢する。
33	仲間とくい違った時は願望を抑える。
34	自分には不都合だったり損なことでも他の人のためにゆずれる。
36	思い通りにゆかないとかんしゃくを起こす。
48	仲間と意見の違う時、相手の意見を入れられる。
50	他の人と同じ物を欲しがらる。
〈持続的対処・根気〉	
3	少し難しいことをさせようとすると“できない”と言ったり尻込みする。
7	ちょっと失敗したりうまくいかないと、すぐあきらめてしまう。
17	自分のしたことを人にけなされると、しょげてしまう。
25	命令されたことがいやなことや難しいことでも遂行できる。
35	課せられた仕事を途中で放り出さなくて、最後までやり通す。

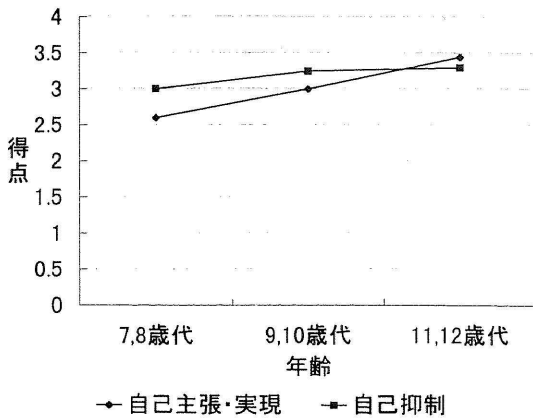


Fig. 1 自己主張・実現と自己抑制の得点の変化

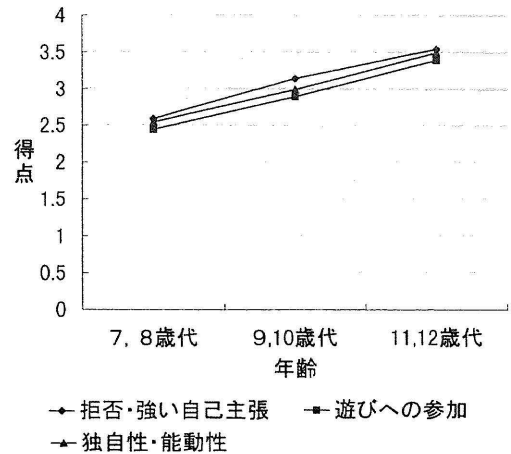


Fig. 2 自己主張・実現の下位次元の変化

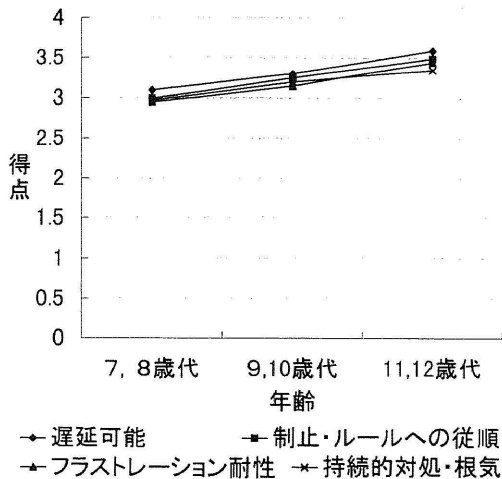


Fig. 3 自己抑制の下位次元の変化

Table 3 下位次元の得点

下位次元	平均得点	SD
〈自己主張・実現〉		
拒否・強い自己主張	3.2	1.2
遊びへの参加	2.8	1.2
独自性・能動性	2.9	1.2
〈自己抑制〉		
遅延可能	3.4	1.0
制止・ルールへの従順	3.2	1.0
フラストレーション耐性	3.1	1.1
持続的対処・根気	3.1	1.1

にダウン症児がしつけの影響をあまり受けなかった可能性も考えられる。いずれも推測の域をでないが、これらについては今後検討していく必要があると思われる。

下位次元についてみると、年齢による変化はFig.2、Fig.3の通りであった。得点の伸びは、全ての次元において自己主張・実現面の方が自己抑制面よりも高かった。また、自己主張・実現面の下位次元においては、「拒否・強い自己主張」、「独自性・能動性」、「遊びへの参加」はほぼ同じ程度伸びていた。一方自己抑制面の下位次元においても、いずれの下位次元もほぼ同じ程度伸びていた。次に、各次元の平均得点を求

めたところ、最も得点の高かった次元は「遅延可能」であり、最も得点の低かった次元は「遊びへの参加」であった(Table 3)。最も得点の高かった次元の「遅延可能」は、遊びの順番や欲しい物、したいことなどを待てることを中核としており、このような待機行動がダウン症児にとって最も優れている自己制御機能であることが示唆された。逆に、最も得点の低かった次元の「遊びへの参加」は、いずれも友達との遊びに関する項目が大半を占めており、このような積極的な友人とのかかわりがダウン症児にとって最も劣っている自己制御機能であることが示唆された。また、柏木(1988)の健常幼児を対象とした研究(Table 4)では、最も得点の高かった次元は「遅延可能」であり、ダウン症児の結

果と同じ結果であるが、最も低かった次元は「フラストレーション耐性」であり、ダウン症児の結果とは異なっている。従って、ダウン症児は遊び場面において、順番を守ったり欲求を抑えたりすることは健常児と同様に優れているが、自分から主体的に他児と関わって遊んだり、遊びの中で他児とうまくやりとりをしながら遊ぶことは劣っていることが示唆された。

各項目についてみると、得点上位項目 (Table 5) は「好きな玩具、選びたい玩具を選んでとれる」「いやなことは、はっきりいやと言える」の2項目は「自己主張・実現」の領域で、「思い通りにゆかないとかんしゃくを起こす」「“ちょっと待っていなさい”で待てる」の2項

目が「自己抑制」の領域であった。得点下位項目 (Table 6) は、「仲間と意見が違う時、相手の意見を入れられる」と「命令されたことがいやなことや難しいことでも遂行できる」の2項目が「自己抑制」の領域で、「状況に応じて行動を変えられる」と「入りたい遊びに自分から“入れて”と言える」の2項目が「自己主張・実現」の領域であった。

これらより、自己主張・実現面において、ダウン症児は選択場面での意思表示や拒否の意思は明確に示すものの、より主体性が求められる他児へのかかわりに関しては劣っていることが示唆された。岡崎 (1991¹²⁾) も指摘しているように、確かにダウン症児は、よく慣れた大人との関係は非常に密にとれるものの、子どもとの相互交渉が少なく仲間関係の広がりには不十分さを感じるという臨床的経験をする人が多い。健常幼児の柏木の研究 (1988) では、下位次元の「遊びへの参加」は自己主張の下位次元において最も優れていた (Table 4) ことを踏まえると、このような傾向はダウン症児に特有なものであると推測される。そして、このような傾向は、鈴木ら (1997¹⁴⁾) の S-M 社会生活能力検査を用いたダウン症児の研究において、意思交換領域の「見たり聞いたりしたことを自分から話せる」や「テレビで見た内容を友達どうして話し合え

Table 4 健常幼児の結果 (柏木, 1988)

下位次元	平均得点
〈自己主張・実現〉	
拒否・強い自己主張	3.3
遊びへの参加	3.4
独自性・能動性	3.3
〈自己抑制〉	
遅延可能	3.5
制止・ルールへの従順	3.4
フラストレーション耐性	3.1
持続的対処・根気	3.3

Table 5 得点上位項目

項目	平均得点	SD
好きな玩具、選びたい玩具を選んでとれる。	4.1	1.2
思い通りにゆかないとかんしゃくを起こす。	3.9	1.0
いやなことは、はっきりいやと言える。	3.7	1.0
“ちょっと待っていなさい”で待てる。	3.6	1.0

Table 6 得点下位項目

項目	平均得点	SD
仲間と意見の違う時、相手の意見を入れられる。	1.8	1.1
状況に応じて行動を変えられる。	1.9	1.0
入りたい遊びに自分から“入れて”と言える。	2.3	1.2
命令されたことがいやなことや難しいことでも遂行できる。	2.4	1.1

る」といった項目が、通過困難な項目として上げられていることにも反映していると考えられる。さらに、このような特徴は、集団生活での協調性は認められるが一步前向きのパイタリティに欠けるという(水田, 1981¹¹⁾) 15歳以上のダウン症者の社会性の特徴とも一致する。従って、今後ダウン症児のより主体的な自己主張を促すためには、大人との選択場面や拒否・要求のやりとりにとどまるのではなく、集団活動などで仲間同士の相互交渉の場をより多く設定し、その中で彼らの主体性を引き出すような援助が必要であると考えられる。

しかし、このような自己の主体性の特徴は、自他の区分が曖昧で独立主体としての「個」の意識が弱く、周囲の他者に規定されがちである(高田・丹野・渡辺, 1987¹⁶⁾) という日本人の自己の特徴を反映しているとも考えられる。従って、単なるダウン症児の自己の特性として捉え発達援助を模索するのではなく、社会的環境条件をも考慮して検討していく必要があると思われる。

自己抑制面においては、順番を守ったり、待機行動においては優れているものの、他者とのかかわりの中で相手の意見を踏まえた柔軟な対応に関しては劣っていることが示唆された。これは、ダウン症児は自ら積極的にかかわることを不得手としている一方で自分の意見に固執しがちであることを示している。このような傾向は、細川・池田・橋本・菅野(1992⁴⁾)の学齢期ダウン症児を対象とした問題行動の調査において、「がんこである」の項目が最も問題とされる行動として報告されていることと一致する。そして、この固執やがんこことといった行動傾向が「状況に応じて行動を変えられる」という項目の得点も低くしていると考えられる。成人ダウン症者における固執傾向は、従来より特徴的な行動傾向の一つとして報告されている(池田・菅野・橋本・細川, 1994⁵⁾) が、学齢期においても既にそのような傾向を示していることが改めて明らかとなった。従って、今後ダウン症児・者のこのような固執やがんこことといった自己抑制面の特

性が、どのような要因によって生じているのか検討するとともに、よりスムーズな対人関係を促すためにこれらの特性を改善していく方法を検討する必要があると考えられる。

2. 自己制御機能の発達を規定する個人内要因の検討

自己制御の得点と生活年齢の関連性について検討するために、それらの相関係数を求めた(Fig.4)。結果は、 $r=0.56$ ($F(1,44)=21.63$, $P<.01$)であり、中程度の相関があった。これらより、自己制御の得点は生活年齢とは相関があることが明らかとなった。従って、自己制御機能は生活年齢が上昇するにつれて発達する傾向があることが示唆された。今後は、生活年齢が高くなるにつれて発達すると予想される個人内要因として、言語発達等との関連性について検討するとともに、親の養育態度等の生活環境の要因との関連性についても検討していく必要があると考えられる。

次に、自己制御の得点と精神年齢の関連性について検討するために、それらの相関係数を求めた(Fig.5)。結果は、 $r=0.29$ ($F(1,27)=2.48$, $P>.10$)で相関はなかった。従って、自己制御機能の発達に精神年齢は関連性がないことが示唆された。

さらに、自己制御の得点と社会生活年齢の関連性について検討するために、それらの相関係数を求めた(Fig.6)。結果は、 $r=0.17$ ($F(1,44)=1.31$, $P>.10$)で相関がなかった。また、自己制御の得点と「自己主張・実現」、「自己抑制」についてそれぞれ社会生活年齢の低位

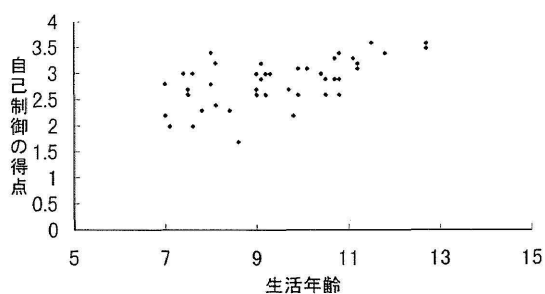


Fig. 4 自己制御の得点と生活年齢の相関

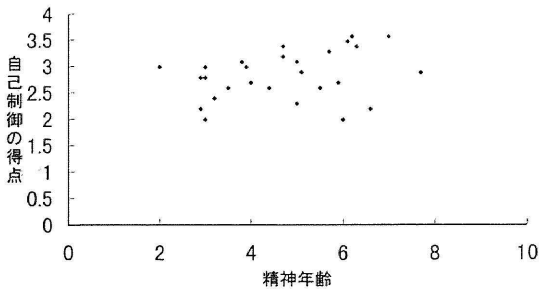


Fig. 5 自己制御の得点と精神年齢の相関

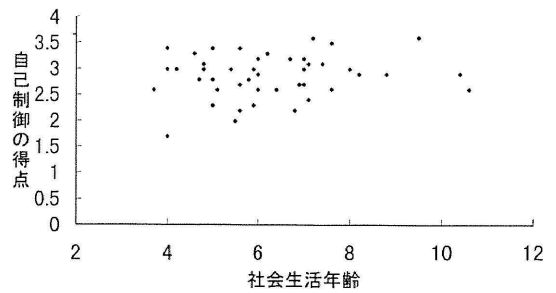


Fig. 6 自己制御の得点と社会生活年齢の相関

Table 7 学校・学級別人数・平均生活年齢・平均精神年齢(ヶ月)

	人数	CA	MA
養護学校群	11(6) [°]	121.3(15.9)	50.2(11.8)
特殊学級群	16(11) [°]	115.6(16.1)	60.6(17.1)
普通学級群	19(12) [°]	106.3(20.3)	56.9(15.9)
全体	46(29) [°]	121.3(19.0)	57.3(16.2)

注1) [°] 印の()は田研・田中ビネーテストにより MA を求めることができた人数

注2) ()内は SD

次元である「身辺自立」「移動」「作業」「意思交換」「集団参加」「自己統制」についても相関係数を求めた。その結果、全ての下位次元において相関はなかった。従来より、自己制御機能の自己主張面に関しては、ソーシャルスキルの一因として考えるべきだという指摘(庄司, 1996¹⁵⁾)があった。しかし、「自己主張・実現」も S-M 社会生活能力検査の全ての下位次元において相関はなかった。従って、S-M 社会生活能力検査は、自己制御機能における自己主張面に関する内容はほとんど測定していないことが示唆された。これは、S-M 社会生活能力検査は、「身辺自立」や「移動」「作業」のように、ADL と考えられる項目が多く含まれていること、「集団参加」と「自己統制」の項目においても、自己の主体性を測定するような質問項目があまり含まれていなかったためと考えられる。

3. 自己制御機能と環境要因の検討

養護学校小学部、小学校特殊学級、小学校通常学級の所属学校・学級別の人数、平均生活年齢と平均精神年齢は Table 7 の通りである。所

属学校・学級による自己制御機能の発達的变化について検討するために、所属学校・学級を要因とする一元配置の分散分析を行った。しかし、自己制御の得点、「自己主張・実現」、「自己抑制」いずれにおいても有意差はなかった。このような結果は、それぞれの被験者が所属している学校・学級は異なるものの、ほぼ同程度の自己制御の得点であることを示している。従って、本調査におけるダウン症児の自己制御機能の発達に関しては、所属する学校・学級の違いという環境要因の影響は受けていないことが示唆された。

しかし、それぞれの学校・学級に所属している被験者は、生活年齢及び精神年齢が異なっており、一概に環境要因の影響がないとは言えない。今後は、同じ所属学校・学級において生活年齢や精神年齢等の個人内要因の変化にともない、自己制御の得点がどのような変化をするのかについて検討する必要があると考えられる。

IV. まとめ

- (1) ダウン症児の自己制御機能における二領域の得点変化は、7、8歳代においては自己抑制面が自己主張・実現面より高得点であるが、11、12歳代には逆に自己主張・実現面が自己抑制面より高得点になることが明らかとなった。
- (2) ダウン症児の自己主張においては、選択場面での意思表示や拒否の意は明確に示すものの、より主体性が求められる他児へのかかわりに関しては劣っていることが示唆された。
- (3) ダウン症児の自己抑制においては、順番を守ったり、待機行動においては優れているものの、他者とのかかわりの中で相手の意見を踏まえた柔軟な対応に関しては劣っていることが示唆された。
- (4) ダウン症児の自己制御機能の発達には、自己制御の得点と生活年齢が中程度の相関があり、精神年齢及び社会生活年齢は相関がないことが明らかとなった。
- (5) ダウン症児の自己制御機能の発達は、所属学校・学級の違いによる有意差は認められなかった。

文献

- 1) Bandura, A. (1978) The self system in reciprocal determinism. *American Psychologist*, 33, 344-358.
- 2) 林 弥生・河東田博 (1996) マディス・カヤンディ著 カヤンディ式「生活の質」評価マニュアル. 四国学院大学論集, 90, 109-150.
- 3) Hill, S. D. and Tomlin, C. (1981): Self-recognition in retarded children. *Child Development*, 52, 145-150.
- 4) 細川かおり・池田由紀江・橋本創一・菅野 敦 (1992) 学齢期および青年期ダウン症児・者の適応行動の特徴. *心身障害学研究*, 16, 111-116.
- 5) 池田由紀江・菅野 敦・橋本創一・細川かおり (1994) ダウン症者の早期老化に関する心理学的研究. 平成5年度科学研究費(一

- 般研究B) 研究成果報告書.
- 6) 菅野 敦・池田由紀江・上林宏文・大城政之・橋本創一・岡崎裕子 (1987) 超早期教育を受けたダウン症児の発達特性—津守式乳幼児精神発達質問紙による検討—. *心身障害学研究*, 12 (1), 35-44.
 - 7) 柏木恵子 (1988) 幼児期における「自己」の発達 行動の自己制御機能を中心に. 東京大学出版会.
 - 8) 今野和夫 (1997) ダウン症児の自己意識の発達に関する研究—連絡帳の分析を通して—. *秋田大学教育学部研究紀要 教育科学部門*, 52, 127-133.
 - 9) Loveland, L. A. (1987) Behavior of young children with Down syndrome before the mirror: Finding things reflected. *Child Development*, 58, 928-936.
 - 10) Mans, L., Cicchetti, D., and Sroufe, L. A. (1978) Mirror reactions of Down's syndrome infants and toddlers: Congnive underpinnings of self-recognition. *Child Development*, 49, 1247-1250.
 - 11) 水田善次郎 (1981) ダウン症者の社会生活の実態. 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 28, 111-138.
 - 12) 岡崎裕子 (1991) ダウン症乳幼児の社会性の発達—自己・他者認知を中心に—. *特殊教育研究*, 29 (3), 55-59.
 - 13) 岡崎裕子 (1994) ダウン症児の就学前教育プログラムのための予備的研究—小集団指導場面での「自己」に関する行動記録から—. *大谷女子大学紀要*, 28 (2), 178-188.
 - 14) 鈴木弘充・小林知恵・池田由紀江・菅野 敦・橋本創一・細川かおり (1997) 新版 S-M 社会生活能力検査によるダウン症児の発達特徴. *心身障害学研究*, 21, 139-147.
 - 15) 庄司一子 (1996) 幼児・児童の Self-Control の発達とその規定要因に関する研究. 風間書房.
 - 16) 高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲 (1987) 自己形成の心理学—青年期のアイデンティティとその障害. 川島書店.
 - 17) 建川博之 (1968) ダウン症状群の personality traits. *東京学芸大学特殊教育施設研究紀要*, 2, 214.

A Study of the Development of Self-Regulation in Children with Down Syndrome

**Michio KOJIMA Yukie IKEDA Atsushi KANNO
Souichi HASHIMOTO Kaori HOSOKAWA**

The purpose of this study was to investigate the development of self-regulation in children with Down syndrome. “The questionnaire regarding behavior” developed to measure self-regulation were filled out by classroom teachers for children with Down syndrome. As results, it showed that the children of seven and eight years old were good development in self-control, although it showed that the children of eleven and twelve years old were better development in self-assertion and self-actualization than in self-control. From the result of subcategory analysis, it was suggested that the children with Down syndrome were not good at interacting with peers in the situations requiring independence in self-assertion and self-actualization. Besides, it was suggested that the children with Down syndrome were not good at flexible reactions with acceptance of partner’s opinions when they interacted with others in self-control. The findings also included that the development of self-regulation in children with Down syndrome had medium correlation with chronological age, and little correlation with mental age and social age.

Key Words : Down syndrome, self-regulation